

「事実上の医療難民だ」 沖縄コロナ感染拡大、一部の病院に急患集中 搬送先が見つからない例も

7/09 沖縄タイムス



夜間に次々と運び込まれる救急患者。新型コロナ以外の患者も増え、医療現場は逼迫している＝4日午後7時半過ぎ、豊見城市の友愛医療センター（沖縄タイムス）
新型コロナウイルス感染拡大で、救急搬送が一部の病院に集中している。沖縄県によると6月26日～7月2日には搬送先が見つからず、最大で21回も医療機関に問い合わせたケースが発生した。現場の医師は「事実上の医療難民だ」と危機感を募らせる。コロナ対応に当たる救急現場取材した。

4日夜、豊見城市の友愛医療センター。「高齢者が倒れ、意識はない模様」。消防本部から同センターにドクターカーの出動要請が入った。救急科部長の山内素直医師が直ちに現場に急行。患者は救急車で搬送され、意識を取り戻した。

同じ時間帯。また病院の電話が鳴った。「コロナかもしれない。検査してほしい」。看護師が「当院は重症度の高い患者を優先しており、無症状の人の検査や診察は行っていません」と何度説明しても納得せず、最後は一方向的に電話が切れた。同様の問い合わせや来院は後を絶たず、業務が滞る場合も多いという。

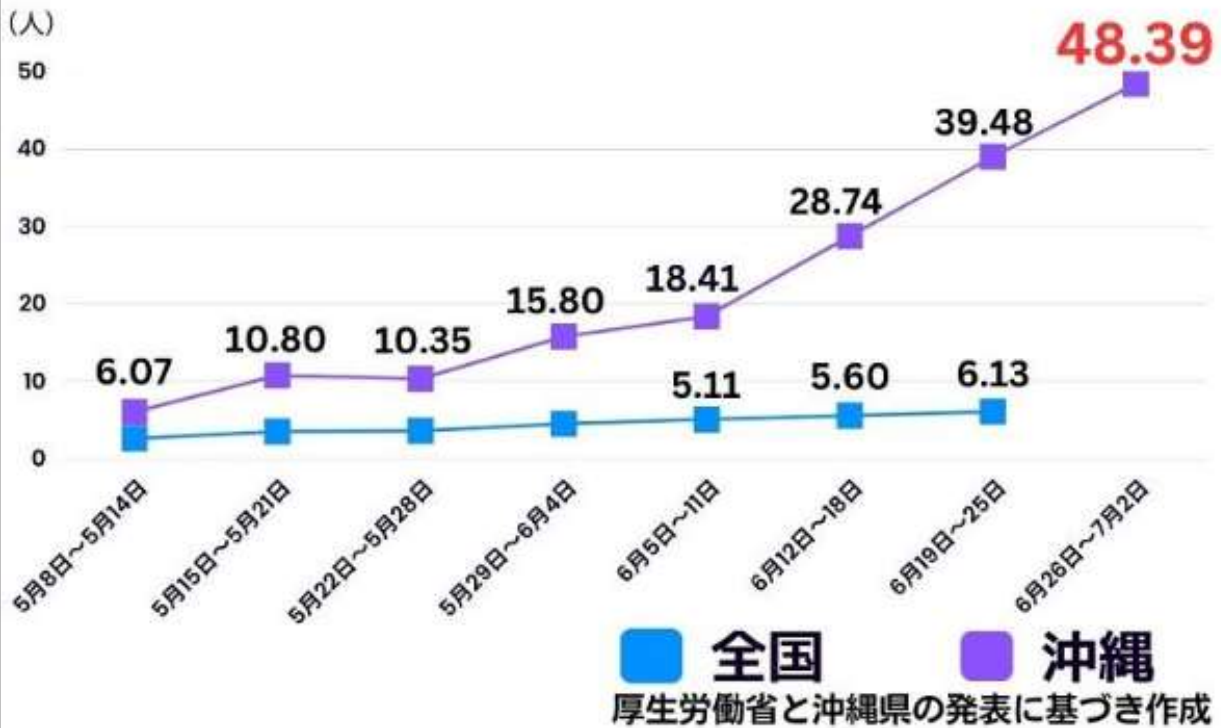
ドクターカーは、病院に患者を呼び寄せる救急車と違って、医療チームの方が現場に向かう車両だ。一分一秒を争う重篤な患者を、早く診ることができる。

山内医師によると要請は通常、1日に2件前後。しかし、今は2日半で10件以上もある「異常事態」だ。

背景には、感染症法上の位置付けが5類に移行し、人の動きが活発になったことがある。梅雨明け以降は観光客による水難事故も後を絶たない。ただでさえ急患が多い夏場にコロナ流行が追い打ちをかけ、医療現場を逼迫（ひっぱく）させている。

「これから夏休みに入れば、どうなるか。受け入れを繰り返し断った昨夏のような光景は、二度と見たくない」。山内医師の表情はずっと硬かった。

定点当たりの新型コロナウイルス感染症患者報告数



■ 発熱急患の8～9割が陽性

「出口の見えないトンネルを、ずっと歩いているようだ」

友愛医療センター（豊見城市）救急科部長の山内素直医師は、拡大が続く新型コロナウイルス感染に頭を悩ませる。救急患者が絶えず、取材前日の3日は45人中、8人がコロナ陽性。発熱者に限ると8、9割がコロナだという。

山内医師は「まさに数の威力」と表現する。比較的軽症な患者は県の新型コロナ感染者ケアステーションへ転院してもらうなど、ベッドを空ける最大限の努力を続けているが、「毎日が綱渡り」の状況だ。

増え続ける患者に対応するため、コロナ病床を15床まで増やしている。ただ、コロナ病床は隔離などが必要なため、引き換えに全388床のうち27の一般病床を減らさざるを得なかった。可能な限りコロナ患者を受け入れたい一方で、コロナ以外の一般患者にしわ寄せが及ぶジレンマが常につきまとう。

感染対策で看護師も一般病床の2倍程度が必要になる。本人や家族の感染で休業するスタッフも多い。人手が足りず、予定していた手術を延期するなどの影響が出ている。

山内医師は「正直、コロナを診ない方が体力的にも経営的にも楽だが、そうも言っていない」と話す。関係者によると、コロナ病床拡大は病院の負担や一般医療へのしわ寄せが大きいと、発熱患者の受け入れをためらうケースがある。

山内医師は「特定の病院に患者が集中せざるを得ないのが現状。幅広い医療機関でコロナ患者を受け入れる体制を構築できれば、たらい回しの状況は少しは改善できるはずだ」と力を込める。県民にも、「安易に救急車を呼ばないなどの理解が大切だ」と呼びかけた。（社会部・下里潤）